
ネクロマンテック・マザー（前編）

カトラス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ネクロマンテック・マザー（前編）

【Nコード】

N4945C

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

僕は夏生まれなのだが、夏が大嫌いなんだ！何故、夏が嫌いって……どうぞ、僕の狂気の世界を楽しんでください。イヒイヒイヒイ

(前書き)

本作品をヒッチコックとユルグ・ブットゲライト監督に捧げます。
夏ホラー2007参加作品

ネクロマンテック・マザー (前編)

ある暑い夏の日、僕は時々見る悪夢にうなされて目を覚ました。僕のパジャマは悪夢のせいで掻いてしまった寝汗がぐっしょりと肌にこびりつき不快である。ベッドのシーツも、あまりの恐怖のために失禁してしまったのだろうか濡れていた。

僕を朝から嫌な気持ちにさせる夢の内容は、数年前におこった夏の日の忌まわしい出来事……

僕にとっては忘れてしまいたい出来事なのだが、こうして時々、夢に現れては僕を苦しめる。夢の中では、両親が激しく罵り合っていて、僕は両親の喧嘩している部屋のドアの隙間から、こそっと覗き見ていた。父さんが激しく母さんを罵倒していて、どうしてこんな事するんだ！ とか子供の教育によくない！ と父さんは唾をとばしながら、わめいていた。母さんは黙って聞いていたが、突然、近くにあったスタンドライトで父さんの頭を殴ったのだ。ドスツと鈍い音がして、父さんの頭から血が噴出した。そして、ピクピク痙攣している父さんの首をネクタイで絞めだした。母さんは物凄い形相をして、ベッドのふちに足をかけて思いつきり踏ん張りながら、父さんの首を締め上げる。僕はそんな事したら、父さんが死んでしまうからやめてよと思ったが、怖さのあまり声も出ないし、母さんが怖かったので何も出来ず、ただ父さんが口から血の泡を吹いて死んでいくのを見ているのが精一杯だった。父さんの死体の傍らには、僕が最近飼いだした猫が無惨にも腹が裂かれて横たわっていた。

僕は汗で濡れてしまったパジャマを着替えると、仕事に行く支度をした。さっきの悪夢のせいで、僕の心臓は、まだバクバクしている。僕は気分をおちつける為に、アイスコーヒをグラスに注いだ。コーヒを飲みながらテレビをつけると、天気予報をしていて予報官のおじさんが今日も暑くなりますので十分な水分補給をして熱中

症に注意してくださいといっている。そのあとに週間天気予報で、ここ一週間は夕方にかけて大気の状態が不安定になりやすいので、昼間晴れていても、突然の夕立ちによる落雷や雷雨にお気をつけてくださいとのことである。僕は連日の暑さのためで、多少夏ばて気味なので涼しくなるなら雨ぐらいだったら降ってもかまわないと、その時は思っていた。コーヒーを飲み終わって、気分が少しおちついた僕は、母さんに朝のあいさつをしてから、仕事にいくために、自宅をあとにした。

僕の名前は根黒 技一 独身で、今は母さんと二人暮らし、仕事は定職に就かず、近くの工場で今は派遣の仕事をしている。歳はちょうど今年の夏で三十歳になったばかりである。夏生まれの僕だが、僕は夏が大嫌いだった。

僕が夏が大嫌いな理由は、一緒に住んでいる母さんがひどく暑がりな為である。

僕と母さんは京都に住んでいるのだが、京都というところは、四方が山に囲まれている盆地に街が建てられているので、熱が山によって外に逃げず、くぼ地に建てられている市街地に熱がこもるので、実に夏場は暑いのだ。暑さが苦手な母さんの為に、我が家では室内の温度は年中15度と決まっている。夏場以外なら、この温度を保つのは、さほど難しいことではないのだが、京都においては夏場に15度を保つのは至難であった。

だから、我が家では母さんのいる居間にはエアコンが三台置かれていて、一日中フル稼働している。全くもってして、電気代がバカにならないのだが、暑いと母さんの機嫌が凄く悪くなるので僕はいたし方なく思ってるわけである。僕は母さんのご機嫌を損ねてしまつて、今は冷蔵庫の中でバラバラになって眠ってる父さんのようになりたくないのだった。父さんをバラバラにして、冷蔵庫の中に入れたのは僕なのだが、それには理由があつて、父さんを絞殺してしまつた母さんは、しばらくの間、死体を処理しないで、死んだ父さん

と性行為をしていた。父さんは、さすがに死んでから二日ほどしてから、体が腐り始めてきて、異臭を放つようになっていたが、母さんはおかまいなしに、父さんの死体と戯れていた。さすがに、これでは近所の住人に異臭で通報されると思った僕は、母さんをなだめて風呂場で父さんの体を切断して、冷蔵庫に入れた次第である。

父さんがいなくなつてからというもの、母さんの欲求は僕にむけられた。僕は週に、三回ほど母さんの夜の相手をしなさいといけない。最初の頃は、さすがに母さんと性行為を持つことに、僕は抵抗を感じていたが、今ではまんざらでもなかった。まんざらでは無いのは、性行為をしている時は親子関係ではなく、恋人のように母さんと接することが出来る。そして、性行為が終わると母さんは、僕のふだん思つてることや悩み事を聞いて、的確なアドバイスをしてくれる。僕はそんな優しい母さんが大好きだ。

「おい、根黒さん。ポケットとしてるんじゃないぞ！ 考えごととしてる暇があつたら手を動かせ！ 根黒さんのせいでラインが停まるじゃないか！」

僕は仕事中、母さんの事を考えていたら、工場の正社員に怒鳴られてしまった。僕を怒鳴りつけてるのは、田辺といって、見た感じ二十四、五歳そこそこの若造である。なにかにつけて、僕に因縁をつけてくる嫌なやつだ。特に夏場になつてからは工場に冷房が無い為に田辺は暑さのためか、常にイライラしててなにかにつけて僕にあたりちらす。僕は母さんとの生活費と毎月多額の請求がくる電気代を稼ぐために我慢してるのだが、いい加減、田辺にはこりこりしている。

「なに、反抗的な目をしてるんだ！ 嫌ならいつでも辞める！ 根黒さんの代わりはいくらでもいるんだぞ！」

そう言つて、田辺は僕の頭を軽くこつくと、自分の作業場に戻つていった。

毎日、毎日繰り返される辛い日々だが、これも、母さんの為だと

思って我慢した。しばらくすると、田辺がまたやってきて、今度は残業してくれないかと言ってきたが、今日は母さんと性行為する日だったので、丁重に断ってやった。田辺は舌打つしたが、田辺自身忙しかったのか、文句も言わず戻っていった。そうこうしているうちに、作業終了を意味するチャイムがなって嫌な仕事が終わった。僕は早々に作業着を着替えると、一目散に工場を後にして自宅に戻った。

自宅に帰ると、すっかり汗と油で汚れてしまった体をシャワーで洗い流すと、母さんのいる居間にいった。

居間のドアを開けると、物凄い冷気を感じた。とても夏とは思えない環境だった。エアコンの稼働音がブォーンブォーンと部屋中に響きわたっている。

「ただいまあ、母さん」

「おかえり、技一。今日もお仕事ご苦労様」

母さんは優しく笑顔で迎えてくれた。そして、僕のおでこに軽くキスをしてくれた。それを、きっかけにいつものように僕と母さんは愛し合った。僕は仕事でのストレスがたまっているのが原因なのか、いつもより激しく母さんと愛し合った。

「いいわ、いいわあ、技一もつと激しくしてえ〜」

「はあ〜はあ〜、母さん、母さん、僕もう我慢できない」

「いいのよ。技一、母さんにあなたの温かいものちょうだい」

「かあ、母さん、いくう……いつちやうよ」

そうして、僕は母さんの中で果てた。

性行為が終わったあと、僕は母さんに思い切って悩みごとを打ち明けた。

「実はね、母さん悩み事があるんだよ」

「いつたい、どうしたの？」

「うん……」

「なんなんだい？ 母さんは黙ってる子は嫌いだよ」

「うん……僕、会社でいじめられてるんだよ。それで、もう仕事にいくのが辛くて、辛くて」

僕は母さんに田辺の事を細かく話した。

「お前みたいなの、優しい子をいじめるなんて、ひどい奴だね。母さんがそいつを懲らしめてあげるよ」

「母さん、懲らしめるって？ 何するの？」

「全く意気地のない子だね。いいから、今度、適当な理由をつけて、そいつを家につれてきなさい。」

そしたら、全てが解決するのよ」

「うん。わかったよ母さん」

母さんは一体、田辺に何をやるのだろうか？ ただ分かってるのは、母さんが僕の悩み事を聞いてから、ニタニタ薄ら笑いをうかべている状況から判断して、田辺はただでは済まないことは事実である。

次の日、僕は昼休みに田辺のところへ行って、自宅に来ないかと誘ってみた。普通に誘ったら、絶対に来ない田辺なのだが、彼はサーフィンが趣味なので、自宅にいらぬボードがあるのでよかつたら貰ってほしいと言って誘い出す事にした。最初、僕がサーフィンのボードを持つてること自体に疑っていた田辺だが、事前に調べていたサーフボードのメーカー名をだしたところ、目を輝かせて話に喰い付いてきた。

「本当にいいんすか？ 買ったなら高いんだよね」

「田辺さんが、気にいいたら、持って帰ってくださいよ。僕あまりサーフィンいく時間ないですし、田辺さんに使ってもらったほうがボードも喜ぶってものですよ」

「それで、根黒さん。いつボード取りにいつていい？」

「明日の金曜日仕事終わってからってことにしませんか」

僕は田辺にそう言った。

「俺はボードがいただけるのだったら、いつでもいいですよ」

「それじゃ、明日ってことで、田辺さんお願いします」
そうして、僕は田辺をおびきよせる事に成功した。その日は作業が遅れても田辺は文句も言わず、僕の作業を手伝ってくれた。全く人ってのは、げんきんなものだと思っただ。

僕は帰宅すると早速、母さんに報告した。

「母さん。明日、僕をいじめてる奴つれてくるよ」

「そうかい。それはよかったね」

「でも、僕、あいつに嘘ついちゃった。サーフボードなんか持っていないよ。どうしよう？ 母さん」

「気にすることないよ。お前は母さんに紹介するだけで……」

母さんは、またもニタニタ笑っていた。その後、僕と母さんは、昨日に引き続き激しく愛しあったことは言うまでもない。

金曜日朝になった。

昨日は興奮のあまり、なかなか寝付けなかったが、目覚めは最高である。いつものようにアイスコーヒを飲みながらテレビの天気予報を見た。予報によると、今日は猛暑日になるとのことだった。

このところの京都は真夏日や猛暑日が連日繰り返され、夜になると熱帯夜という地獄のような日々である。いつもの僕なら予報官がいつてる暑さを意味する言葉を聞いただけで、うんざりと気分が滅入るのだが、今日の僕の気分は、外の天気のように雲ひとつなく快晴であった。工場にいつてからも、仕事は作業に追われることなく順調に進み、気がつくくと退社時間になっていた。

僕は、田辺の車の助手席に乗り込み、自宅までの道案内をしていた。

「はい、次の信号を右に曲がってもらったら、マンションが見えますので」

「はいよ、右折するのね」

田辺はサーフボードが貰えるとあってご機嫌である。

車が右折して、しばらく走ると、僕達親子が住んでるマンションが見えた。

「今、見えてるマンションです。それから田辺さん、よかつたら晚饭、母さんが用意してくれてますので一緒にどうですか？」

「いいんですかあ、ちょうど俺、腹へってるんでいただきますよ」

「それは、良かった。母さんもいつも二人で食べてるので喜びますよ。車は来客用の駐車場がありますので、そこに停めてもらえますか」

僕と田辺は車から降りてマンションのエレベーターに乗った。僕は四階のボタンを押した。エレベーターの扉が閉まり、ゆっくりと上昇していった。エレベーターから僕達は降りると、薄暗い廊下を進んだ。途中まばらにある天井に設置されてる蛍光灯には、光を求めて虫がいっぱい群がっている。

「ここですよ。田辺さん」

「へえ、結構いいところに住んでるんすね」

「いえいえ、賃貸ですけどね」

僕はそう言っただけで玄関の扉の鍵をあけた。

「どうぞ、田辺さん、汚いところですけどお入りください」

とりあえず、僕は母さんの支度が出来てるのか心配だったので、自室に田辺を案内した。

「田辺さん、ここが僕の部屋なんですよ。食事の準備が出来てるか、母さんに聞いてきますので、しばらく、ここで待っていてください」
「ああ、おかまいなくね」

田辺はそう言っただけで、僕のベッドの脇に腰かけた。

僕は母さんの様子を見に居間にいった。ドアを開けるとエアコンの稼働音がブォーンブォーンとしていて、激しい冷気を吹き出している。

「母さん、あいつを連れてきたよ」

「そうかい、そうかい。食事の準備が出来てるので、早くこの部屋につれてきなさい」

僕は居間のテーブルを見た。テーブルの中央には、メインデッシーであるうか、美味しそうな父さんの生首が置いてあり、頭部が見事にスパツと開かれていて、父さんの脳みそが露出していた。他の料理も、父さんの内臓を料理したものであるう。父さんの長い腸が綺麗に調理されて皿に盛り付けてあった。

「母さん。凄い豪華じゃないか！」

「夏なのでスタミナつけないと思って、腕によりをかけて作ったのだよ」

僕はあまりの豪華さと、興奮のあまり恥ずかしながら勃起してしまった。僕は勃起してしまった一物を片手で押さえながら、田辺を呼びにいった。

「田辺さん。食事の用意が出来てますので、母さんのいる居間に来てください」

僕は興奮のあまり、声を裏返しながら田辺に言っていた。

田辺は腰を上げて立ち上がると、居間に向かって僕のあとをついてきた。

僕はゆっくりと居間のドアを開ける。中からは、ブォーンとエアコンの音がなっている。

「さあ、田辺さん、遠慮せずに部屋の中へどうぞ」

僕は押し出すように、田辺の背中を軽くおして、田辺を居間の中に入れた。

田辺の第一声は寒いだった。

「田辺さん。母さんですよ！」

僕は椅子に座ってる母さんを田辺に紹介した。

「うわあああ、何だよ、これは……」

田辺は、何故だか分からないが、母さんを見て絶叫して、腰を抜かし、居間の床が田辺の失禁によって汚れてしまった。

「田辺さん、どうしたのですか？ 母さんですよ」

僕は母さんの座ってる椅子の後ろに回った。

「こんばんわあ、田辺さん。いつも息子がお世話になってます」

と言って母さんは田辺にあいさつした。田辺はあわあわあして
いたが、ようやく、か細い声で言った。

「母さんって……どう見たって死体じゃないかよ！ それにどうし
て、お前が喋っているんだよ！」

僕は田辺のいってる意味がよくわからない。母さんが死体だつて
？ 今も元気に生きていて、あいさつしたじゃないかよ！

「田辺さん、一体どうなされたの？」

母さんは再び、田辺に語りかけるように聞いた。

「だから、どうして、お前が喋ってるんだよ！ お前の母さんは三
イラみたいに干からびて……」

その時、僕の頭の中で母さんの声が響いた。

「こいつを、殺せ、殺せ、殺せ！」

気づくと僕は、ハンマーを田辺の頭に何度も振り落としていた。

母さんの部屋は田辺の血と脳みそが散乱していた。

ネクロマンテック・マザー（前編）

（後書き）

狂気の世界は後編に続きます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4945c/>

ネクロマンテック・マザー（前編）

2009年3月24日10時33分発行